

共に未来を育てるために

# 進路指導の現場から

第3回

生徒の視野を広げる  
「キャリア探究スキル」

——進路指導の方針について教えてください。

進路指導の目的は、生徒の希望進路実現ですから、入学時の進学の意欲を持続させ、自ら学習に向かうような働きかけを行っています。

本校は1学年約320人の生徒

が在籍していますが、例年120人程度の生徒が現役で国公立大に進学します。うち100人程度が道内の大学に進学しており、道外の国公立大に進む生徒は、20人ほどです。私立大進学に関しても同様の傾向があり、道外の私立大へ進む生徒は10人程度です。

中で選びがちです。中には入学直後から進学先だけではなく、将来の職業まで決めている生徒もいますが、保護者に言われたからという理由が多いようです。

——具体的な内容について、教えてください。

1年次は全員がインターンシップに参加します。事前に受検した職業適性検査の結果を参考にしながら、希望の職種を選択し、学校近隣の事業所で実習をさせます。

続く2年次では大学教員による模擬授業「学び体験ゼミ」を開講しています。これは大学での学びに触れて、興味のある学問への理解を深めることが目的で、生徒は17コースから1つを選び、ゼミ形式で4回連続の講義を受けます。

こうしたプログラムを経て視野を広げたうえで、2年次の秋から、具体的な進学先の検討をさせていきます。

面談を頻繁に実施して  
進路のミスマッチを防ぐ

——貴校の進路指導における特徴はどのような点ですか。

から生徒には、できるだけ外に目を向けてほしいのです。

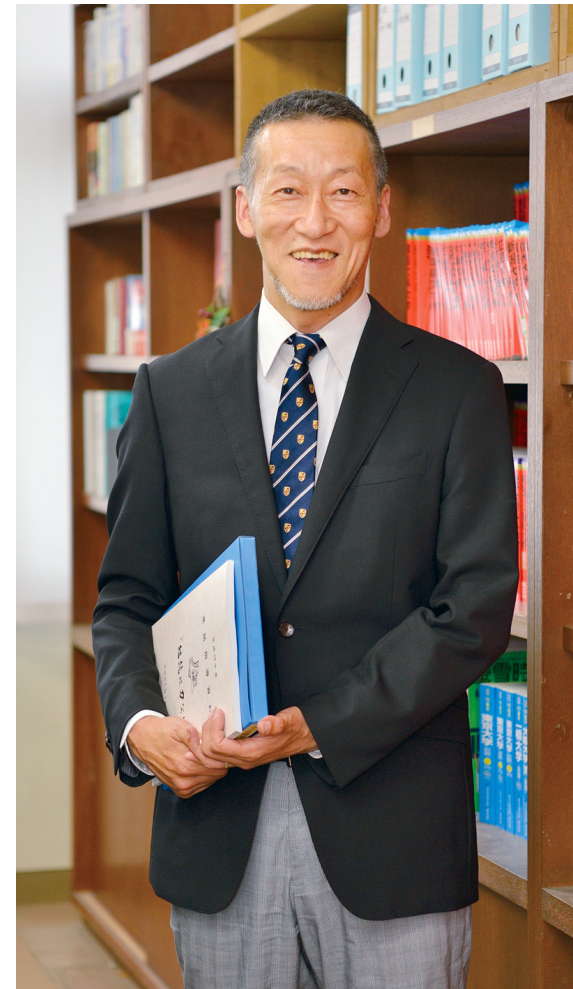
本校は入学段階から国公立大志望者が多いのですが、併願先として多くの生徒が私立大に申し込ますし、進学する生徒も一定数います。ただ、道内の大学という少ない選択肢から選ぶため、特定の私立大学に集中しています。また、「なぜ、わざわざ東京の大学に行く必要があるの」という疑問を持つている生徒も少なからずいます。

だからこそ、道外の私立大学関係者は、「道外の私立大学で学ぶメリット」「その大学だからこそ実現できる将来」を、生徒や保護者と、そして高校教員に、よりきちんと伝わる形でアピールするとい

## まとめ

教員が知りたいのは  
教育の強みと  
大学卒業後の姿

それがシンプルな  
言葉でないと、  
生徒まで伝わらない



北海道札幌手稲高校 進路指導部長

清澤 哲生

きよざわてつお ●教職歴28年。専門教科は地歴。同校に赴任して8年目。2014年より現職。「教育は人なり」を信条に、指導にあたる。

他校に比べて、面談の数が多いことが特徴でしょうか。進路指導部が定めた面談期間以外にも、担任は生徒に声をかけ、マメに話を聞いている。

面談の回数や、細かい内容は担任の裁量に任せていますが、生徒の考えを広げる指導を全員が意識しています。

——面談では具体的な大学の話をすることも多いと思います。高校を訪れる大学関係者から必要な情報は得られていますか。

本校にいらつしやる大学の皆さんは、どなたも奨学金や新しい入試方式、そして道外の大学の方は、地方受験に関する話をよくされます。お金の話や入試方式の話題は、生徒・保護者共に関心の高い事項

です。しかし、正直な話、どの大学もそれに大きな違いがあるようには見えません。



私たちは教員がもっと知りたいのは、「この大学では具体的にどのような教育を行っているのか」「卒業生はどのような場で、どのように活躍しているのか」ということです。そして、それを、高校生でも理解しやすいシンプルな言葉で語っていただくと、教員は生徒に伝えやすくなります。

例えば、生徒から「大学で英語の勉強をしたい」と質問を受けたとします。英語の教員になりたいのか、英語力をきちんと身に付けて留学をめざしているのか、もしくはは英文学を勉強したいかで、勧める大学は違ってきます。しかし、各大学の強みを、私たちが理解していないと生徒に適切な回答をすることができません。結果的に「英語教育に強いイメージがあつて、かつ偏差値が高い大学」を勧めるしかなくなりま

す。 私たちももっと大学について勉強すべきですが、一方で近年は学部の新設や再編成、名称変更が多く、新しい情報に追いつきにくい面もあることは理解してい

——生徒の進路選択に変化を感じることありますか。

保護者の影響力が強くなっていると思います。保護者から「地元に残ってほしい」と言われれば、道内だけで進学先を考えてしまう生徒が本場に多いです。私個人としては、若いときに多様な経験をすることが大切だと思っています。首都圏に出れば、本物に触れる機会も持ちやすいでしょう。だ

## 高校訪問 ワンポイントアドバイス

教員向けの話ではなく  
生徒向けのエピソードを

教員向けの話しこま話よりも、生徒に伝えやすい具体的なエピソードをお聞きたいです。また、教員は自分の目で大学を確かめたいと思っ





「Beginnig Step Program」は、1 年次に異文化を体験させることで大学での学びの方向性を見つけさせることが目的。通常授業に支障がないよう長期休暇中に実施し、単位認定もする。

## 海外での国際体験、留学のプログラム

| プログラム名                 | レベル   | 内 容                                                                |
|------------------------|-------|--------------------------------------------------------------------|
| Beginning Step Program | ★     | 全学部1年生対象。期間は10日間。タイ、ベトナム、中国、台湾のいずれかで異文化体験をする。                      |
| 語学研修(短期)               | ★★    | 長期休暇を利用して1か月程度、言語を学ぶとともに異文化を肌で感じる短期の海外研修。                          |
| 海外ボランティア               | ★★    | 「インド異文化ボランティア体験セミナー」「国際ワークキャンプ」「インドネシアCOP」「内モンゴル緑化ボランティア体験セミナー」など。 |
| フィールドスタディ              | ★★    | 実地調査型のプログラム。『ヨーロッパエコスタディ』『イタリアフィールドスタディ』など。                        |
| 国際インターンシップ             | ★★★   | アメリカ(ロサンゼルス)や中国(香港)で2～3週間のインターンシップを体験。                             |
| 海外英語特訓留学               | ★★★★  | 英語力の向上を目的とした1学期間の留学。                                               |
| 英語特待生留学                | ★★★★  | 国際教養学部生向けのプログラム。英語圏の協定校に1学期間留学して英語を集中的に学ぶ。                         |
| 海外日本語教育実習制度            | ★★★★★ | 日本語教員の資格取得をめざし、「日本語教員資格課程」を受講する学生のためのプログラム。                        |
| 長期派遣留学                 | ★★★★★ | 1学期間から2学期間、海外協定校へ留学。                                               |

★ 1年次限定の海外留学入門プログラム  
 ★★ テーマに沿った活動で異文化により深く触れる  
 ★★★ ビジネスや語学など専門性のある分野に挑戦  
 ★★★★★ 目的意識を持ち異文化の中で暮らすハイレベルな留学体験

測っているのでしょうか？  
 1、2年生全員にGTECを受検させています。入学時はブレイクメントテストとして活用し、2年次のテストで入学後の伸びを測定します。

多くの学生に海外体験をしてもらうには、「大学で何かを変えた。変わりたい」と考えている1年次がポイントになるでしょう。早い段階から海外に目を向けさせるしくみづくりを、さらに進めていきたいと考えています。

「Beginnig Step Program」は、1 年次に異文化を体験させることで大学での学びの方向性を見つけさせることが目的。通常授業に支障がないよう長期休暇中に実施し、単位認定もする。

生も出てくるでしょう。そこで、2015年度から入門プログラムとして、「Beginnig Step Program (BSP)」を設けました。これは、アジア4か国(タイ、ベトナム、中国、台湾)のいずれかの協定校を10日間訪問する、異文化体験プログラムです。現地の日本語学科の学生と交流し、彼らに向けて日本文化のプレゼンテーションを行います。

後者は、短期の国際体験プログラムから長期派遣留学まで、目的や語学レベルに応じた多彩なプログラムを設けています(左図表)。

BS Pはレベルの高いプログラムに段階的に進むための入り口という位置付けなので、参加は1年生限定です。各国とも定員は20人の選抜制ですが、語学力は問わず、面接のみで選んでいます。スター

トしてまだ2年目ですが、初年度の参加者の3割以上が、長期派遣留学など、更にレベルアップしたプログラムに参加しています。

観的な尺度を用いて英語力を測れるからです。例えば、国際体験プログラムに参加した学生が、自ら必要性を感じて、英語の勉強に力を入れたとします。その場合、教員の主観的な成績評価よりも、外部検定のスコアのほうが英語力の伸びを具体的に把握でき、学習に対する意欲も持続できると考えました。また、英語学習でのつまづきが、中退につながるケースもあります。これを防ぐ意味でもGTECを活用して、学生の英語力を把握するようにしています。

「Beginnig Step Program」は、1 年次に異文化を体験させることで大学での学びの方向性を見つけさせることが目的。通常授業に支障がないよう長期休暇中に実施し、単位認定もする。

「Beginnig Step Program」は、1 年次に異文化を体験させることで大学での学びの方向性を見つけさせることが目的。通常授業に支障がないよう長期休暇中に実施し、単位認定もする。

「Beginnig Step Program」は、1 年次に異文化を体験させることで大学での学びの方向性を見つけさせることが目的。通常授業に支障がないよう長期休暇中に実施し、単位認定もする。

「Beginnig Step Program」は、1 年次に異文化を体験させることで大学での学びの方向性を見つけさせることが目的。通常授業に支障がないよう長期休暇中に実施し、単位認定もする。

一步先を行く大学に聞きました！



## 桃山学院大学



### 桃山学院大学学長 牧野 丹奈子

まきのになこ ● 1961年生まれ。1984年大阪大学工学部環境工学科卒。1986年同大学大学院工学研究科前期課程修了。1991年桃山学院大学経営学部専任講師、2003年同大学経営学部教授。経営学部学部長を経て、2016年5月より現職。博士(経営学)

## 多彩なプログラムを提供し 初年次から段階的に異文化に触れさせる

身に付けてほしいのは多様性を受け入れる力  
 貴学のグローバル人材育成の方針をお聞かせください。  
 グローバル化が進展すれば、国際間の競争がいつそう激しくなり、どんな小さな企業でも効率化や合理化が求められます。世の中の進歩や個人の成長のためには、競争に勝つことは大切です。しかし、競争だけを重視すると、視野が狭い人間になってしまいます。

豊かな人生を送るためには、目の前の人を愛する心、人の役に立ちたいという思い、それを実現するための覚悟が必要でしょう。  
 本学はキリスト教系の大学であり、教育ビジョンを「地域で、世界で、人を支える」と掲げています。国内、海外を問わず、世界のどこかで生活するにしても、地域に根づき、その土地で生活する人を支えられるような人材を育てたい、という思いを込めたビジョンです。

付けさせたいとお考えですか？  
 グローバル社会においては、多様性の受容が非常に重要だと考えます。学生には、異なる文化、人種、宗教などの多様性をしっかりと受け入れる力、また、そうした多様性の中で自分の道を切り開く力を付けてもらいたいと考えています。

教えてください。  
 グローバル教育に限らず、「まず体験させ、そこで得た気づきや学ぶことの楽しさを、次の学びにつなげてもらう」というプロセスを大事にしています。そのため、語学力不問のプログラムを数多く用意しました。

### 桃山学院大が提供する留学・国際体験

|                 |                                                                                                                 |
|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| キャンパス内での国際体験    | ・レジデント・アシスタント制度<br>4、5名の学生が留学生の住むマンションに居住し、国際センターと協力しながら生活全般をサポート。<br>・バディー制度<br>担当の日本人学生が、留学生の日常生活を1対1でサポートする。 |
| 海外での国際体験        | 語学力不問の短期研修から、将来につながる力を本気で身に付けたい学生のための長期留学まで、目的や語学レベルに応じたプログラムを多数用意。                                             |
| English Program | 外国語教育センターが企画する、英語学習のためのワークショップ。「ENGLISH LUNCH」「多読のスヌ」[「はじめてのTOEIC」]「Build Your Vocabulary」[「発音ワークショップ」]など。      |

取材・文／本同 撮影(牧野丹奈子学長)／岸隆子





**にしむら・やすし**●1950年生まれ。1973年大阪工業大学工学部建築学科卒。1976年同大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程を修了し、同大学工学部助手。講師、助教授を経て1999年に教授。2013年工学部長。2015年より現職。専門は建築構造。博士(工学)。

本学には、大学入学後に著しく伸びる学生が大勢います。例えば、経済産業省の「社会人基礎力育成グランプリ」では、前年は知的財産学部のチームが準大賞、本年は工学部のチームが大賞を取りまし

ています。さらに、<sup>\*2</sup>「ディプロマ・サブプリメントシステム(DSシステム)」の導入により、在学中の達成度を定期的にフィードバックすることで、主体的な学びの促進と、達成度の可視化による大学院進学や、就職に対する支援体制を強化します。本システムは、企業等と連携し開発することで、社会のニーズにかなう卒業生の輩出につながります。これらの取り組みは、文部科学省のAP「卒業時における質保証の取組の強化」にも採択されています。

かなど、さまざまな課題の検証を行い、各種委員会と連携しながら解決へと導いていく体制を整えました。この体制は大学全体へと広げていく計画です。カリキュラムの充実と合わせて、<sup>\*1</sup>ミニマム・リクワイアメントを測定可能かつ具体的なものとして提示する「適正な成績評価基準に基づく厳正な成績評価」の実施を進めています。これは、授業外学修の促進にもつなげる質的保証の取り組みです。

このキャンパスでは、NEDO(国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構)と共同で、日本初の「ロボットサービス・ビジネススクール」を開講します。梅田という立地を生かして、企業との共同研究、受託事業などを活性化させ、学生の情報発信能力の

少子高齢化が進む日本では、ロボットは期待される分野であり、また、その技術には、機械や電気・電子、情報、インターフェースデザインなどさまざまな学問分野の融合が必要です。こうしたロボットに関わる多様な分野に触れることで、学生の成長を促す効果もあると考えています。

2017年4月には、新たに本学4つ目の学部となるロボティクス&デザイン工学部を開設します。新学部は、大阪の中心地・梅田に建設する地上22階、地下2階の「OIT梅田タワー」に設置します。

このような伸びる学生に機会を与えるしくみを強化しつつ、基礎を確実に修得して卒業させる形へと転換していきます。

## 梅田キャンパスに 先端的な新学部を開設

た。

最近の日本の学生は、勉強をしなくなり、将来への希望を語ることがなくなつた、という話をよく聞きます。しっかりと勉強している学生、しっかりと勉強させている大学が存在しているのは確かです

## 全体の底上げを図り 上位層を伸ばす教育へ

関西の私立大学の中での確固たるリーディングポジションをめざして

# DSシステム導入による 実践力の高い専門職業人の育成

が、高等教育全体が玉石混淆の状態にあることも事実です。この状態が続けば、水が低きに流れるが如く、伸びる学生も易きへと流れていくのではないのでしょうか。小学校から高校までの教育も影響しており、大学教育だけでは決して解決できる問題ではありません。しかし、大学は社会人になる

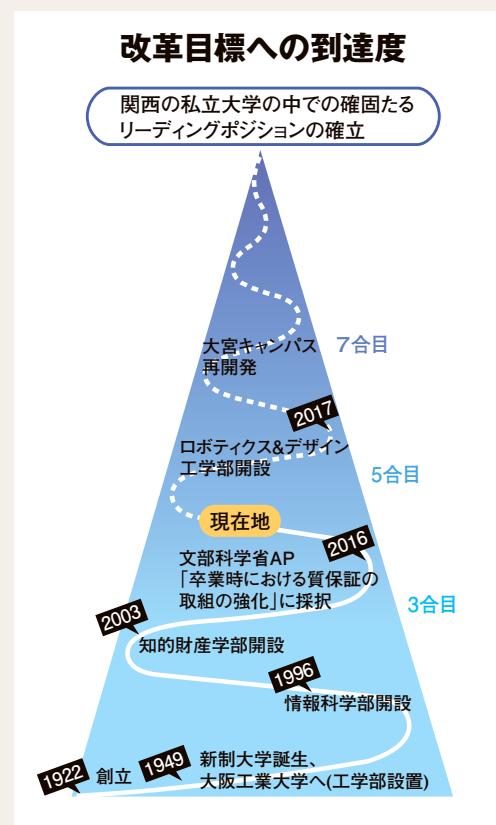
前の最後の教育機関ですから、学生一人ひとりに、主体的に勉強する姿勢や将来を切り開く力を付与する使命があります。学問のおもしろさは、勉強しなければわかりませんし、課題も見えてきません。だからこそ、学生に一定のレベルまでしっかりと学ばせる必要があります。全体の底上

向上や実践的な学びへとつなげていきます。

さらに、新学部設置に合わせて、本学の本拠地である大宮キャンパスのリニューアルも構想中です。全学部が有機的に連携できるような基盤づくりを進めていきたいと考えています。

## 国際PBLをはじめ グローバル教育も推進

グローバル教育にも力を入れています。1年次は語学研修を行い、2・3年次には国際PBLを提供しています。これは、台湾やタイ、インドネシアなどの大学生とチームを組んで課題に取り組むもの。コミュニケーションはすべて英語



\*1 ミニマム・リクワイアメント：学すべき最低基準。\*2 ディプロマ・サブプリメント：学位証書補足資料。学位に添付される補足資料で、取得学位・資格の内容等について説明が記載されたもの。



荒波に挑むトップ

# 私の改革論

No.16

大阪工業大学・学長

西村 泰志

## 一貫性ある3ポリシーで 教育効果を最大化

現在、日本の高等教育機関には、教育の質的保証や質的転換が求められています。そのためには、一貫性のある3つのポリシーを作成・明示し、教育効果の最大化を図る教育活動を実践する必要があります。これに加えて、成績評価制度と修学指導や正課外教育などの修学支援体制の充実により、学生の質を担保できると考えています。

本学は2014年度入学生から工学部の教育課程を大幅に改革しました。翌年、その作業を率いた「教育課程検討委員会」を「教育推進委員会」に改編し、新教育課程が効果的に機能しているかどうかどう